

1 目指す学校像

- 教育の保障と学力の向上。
- 内面（心）へのアプローチ。
- 日常のリズムや風を届ける。

2 本年度の教育目標

- 1 重複障害のある子どもの学習づくりと、そのための効果的な教材・教具の開発を行う。
- 2 南国市との連携を中心として分校のセンター的役割を果たす。
- 3 教科以外の指導の在り方について見直しを行い、その充実を図る。

評価者
○児童生徒 10 名
○保護者 12 名
○病院関係者 4 名

評価の基準

- A：設定した目標を十分達成できた。
- B：設定した目標に対し、ほぼ達成でき、次年度の課題が明確になった。
- C：設定した目標に対し、成果が不十分であり、課題が残った。
- D：設定した目標に対し、ほとんど達成できない。

3 評 価

項 目	昨年度の課題	本年度の目標	目標達成のための手だて	自 己 評 価	学校関係者評価	今後の課題
1 重複障害のある子どもの学習づくり	分校内だけでは限界がある。たとえば外部の専門機関やWeb上の情報など有効的に活用する必要がある。また、全員での取組を充実させるためには、実態把握に関する定期的な話し合いを計画し、課題の共有を図る必要がある。	・障害の重い児童生徒の生活を豊かにするための教材・教具の開発を進め、指導方法について研究する。 ・開発した教材・教具をHP上で情報発信する。	・全員による授業研究を実施し、実態把握に関する話し合い（5回）を持つ。 ・関係機関（近隣の高等学校、大学）と連携してワンクリック教材を2つ以上開発し、玩具の改造と支援機器を製作する。 ・専門家（特別支援教育総合研究所等）による所見を参考にして、教材の検討及び指導方法の研究を行う。	全員で児童の授業に関わり、定期的な話し合いを持ち、実態把握の共有を図った。また、高知工科大学の協力のもと研修を数回実施し新しいソフトを開発したり近隣の専門機関（高知東工業高校）とも連携した取組を継続して対象児童のコミュニケーション力の向上につなげることができた。また特別支援教育総合研究所からの来校指導のもと、教育課題や長期的な指導の方向性を整理することができた。今年度の取り組みを論文としてまとめ、高い評価を得ることができ、目標を達成できた。	A	学校が他機関との連携を継続し、様々な機器を使った取り組みを続け、これまでわからなかった対象児童の能力を引き出してくれたことを評価している。双方向のコミュニケーションができるようになったと保護者も感謝している。コミュニケーションや50音を理解したことで生活が豊かになり、児童の成長を感じている。取り組みは十分達成できている。
2 特別支援教育における分校のセンター的役割	特別支援教育に関する分校教員全員の専門性の向上に努めなければならない。また、センター的な役割を果たすという意味で、分校の役割を地域に明確に周知する必要がある。地域への支援に関しては、出向するだけではなく、校内研修の案内など分校からの働きかけも計画していかなければならない。	・地域支援に対応できるよう校内研修の充実を図る。 ・南国市（近隣の学校等）への支援を推進する。	・校内での研修（特別支援教育全般）を実施し、任意の研修成果を共有する。 ・職員間で発達障害に関する学習会を持つ。 ・病弱教育に関する校内研修の案内等を通して地域へ積極的に発信する。 ・県の事業等を活用した地域支援に取り組む。	校内での研修や夏季休業中に行われた任意の研修の成果を共有する機会を設け、また、病院内外の医療関係者を招聘しての研修会を積極的、計画的に推進し、病弱教育における専門性の向上に努めた。地域の小・中学校校等に研修の案内をするなど、地域支援の推進にも取り組んだが、組織としての特別支援教育の専門性の構築までには至っていない。	B	病弱特別支援学校としての専門性向上のための研修は、前年度以上に推進できている。また、研修会の案内など地域に向けた発信も今年度は出来ており、目標は達成できていると思われる。しかし、異動による大幅な入れ替わりがあり、組織として、特別支援教育全般に係る意識を高めるまでには至らなかったとして学校がBと評価したのであれば、それを尊重する。
3 教科以外の指導の充実	課外活動については内容の見直しが必要である。また、実施可能な交流及び共同学習についても取組内容の充実を図らなければならない。	・課外活動の内容を見直し、放課後の時間の充実を図る。 ・「交流及び共同学習」について実施可能なケースで計画的に取り組む。	・高学年を対象とした内容を検討し着手する。 ・ボランティアを活用して、活動の内容に広がりを持たせる。 ・病棟及び前席校との共通理解、連携を密にし、「交流及び共同学習」について、実施可能なケースで計画的に実施する。	課外活動の時間の内容の充実を図り取り組みを進めた。活動内容によって参加した児童生徒は限られたが、異年齢の集団の活動の場として定着しつつある。また、課外活動の場での子ども同士の関係が、学校での関係づくりのきっかけになりつつあるが、豊かな関係づくりにまで広がったり、児童生徒の自己肯定感を高めるまでには至らなかった。	B	昨年度の課題を受け、教員間でも取り組みに対する意識は高く、課外活動の広がりも見られた。児童生徒のために出来ることを考えてやってくれており、課外活動を楽しみにしている入院児も多い。また、「交流及び共同学習」については、可能なケースは実施しており、目標は達成出来たと評価できる。

A

課外活動については、学部単位での取組を検討するなど内容の充実に向けてさらに工夫が必要である。また、実施可能な交流及び共同学習については長期的な見直しを持って、積極的、計画的に推進しなければならない。